コメ除き関

部の乳製品や麦については、関税化した場合でも政府による一元輸入の維持を目指し、国内農家への影響を最小限に抑える方針だ。

コメを除く関税化容認の……

関税化受け入れ品目

関税化の受け入れ方針を固めた農産物は次の通り。

小麦、大麦、ライ麦、小麦粉、米粉、大裸麦粉、ライ小麦粉、脱脂粉乳、脱脂加糖練乳、全粉乳、ミルクパウダー、ホエイパウダー、バター、ミルク・クリーム、ヨーグルト、でんぷん、イヌリン、雑豆、落花生、コンニャク芋など。

（注）このほか米麦を含む調製食料品、乳製品を含む調製食料品などがあり、品目数は特定できない。

九州大 脳死段階は断念

大阪で

九州大医学部第二外科（杉町圭蔵教授）は二十二日午前、大阪府立千里救命救急センター（大阪府吹田市）で脳死と判定された男性（五三）＝大阪府＝から心停止後に肝臓を摘出、九大病院（福岡市）に入院中の肝硬変の男性患者（五〇）＝長崎県出身＝に移植する手術を始めた。生体肝移植を除く肝臓移植手術は国内で四例目。同日午後七時すぎには移植した肝臓の血管をつなぎ終えるなど手術は順調に進んでおり、深夜には終了する見通し。

（4面に関連記事）

臓器提供者は重いぜんそく発作から脳死状態に陥った。脳死者からの移植の障害となる警察の検視が絡まないケースだったが、提供者の容体急変や、同救急センターを管轄する大阪府の「脳死段階での移植は慎重に」との要請により、移植チームらは当初検討した脳死段階での移植を断念した。

行政側からのストップで、脳死移植より難しい心停止後の移植という変則的な実施となったことは、再び脳死段階での臓器移植の申し出があった場合、医療機関や行政がどう判断するか、移植の再開に課題を残した。移植手術は杉町教授ら三人が担当。

手術中の患者の血圧や腎臓（じんぞう）の機能は落ち着いており、移植した肝臓の状態も良好という。

移植を受けた男性はC型肝炎が進行した肝硬変の末期症状のため、時々意識障害が出る状態。患者と提供者の血液型が異なるなどリスクが高い点についても説明を受けた後、本人と家族が移植に同意した。

脳死状態になった提供者は二十二日未明になり血圧が急に低下するなど容体が悪化。同救急センターと九大は大阪府の要望も考慮して心停止後の摘出に方針を変更。同日午前五時三十五分、心臓が停止した直後に九州大移植チームが摘出し、航空機で九大病院に運んだ。

皇后さま国体出席中止

東四国

宮内庁は二十二日、言葉が出ないなどの体調不良の状態が続いている皇后さまが徳島、香川両県で開かれる第四十八回国民体育大会への出席を取りやめると発表した。国体には天皇陛下がお一人で出掛けられる。

宮内庁は「この際、今しばらくご様子を拝見することにした」と、大事を取っての取りやめであると説明した。

宮内庁によると、皇后さまは二十一日の精密検査

文化功労者

文化勲章

川弘之（七三）、憲法学の芦部信喜（七〇）、内科学の織田敏次（七二）、農業経済学の川野重任（八三）、日本音楽史の吉川英史（八四）、言語学の河野六郎（八〇）、工芸（染織）の志村ふくみ（八九）、文化人類学の中根千枝（六八）、理論物理学の西島和彦（六七）、邦楽の富山清琴（八〇）、日本画の平山郁夫（六三）、スポーツの

村

「死活」握る水質改善

海の問いかけ

点検 西瀬戸

第4部 ★14★

漁協の選択

真珠不況に見舞われた一九六〇年代後半、「究極の選択」をめぐって、宇和島市の三浦漁協（浅野次郎組合長、二百九十二人）内部が大きく揺れた。

「真珠だけでは食っていけん。魚の養殖もやらせろ！」と詰め寄る組合員。漁協幹部は「絶対ダメだ。えさで海が汚れる。真珠と共倒れになったらどうする」と譲らない。「ほかでもやっている。なぜウチだけやれない？」との声に、幹部も「三浦の沖は琵琶湖のようにデリケート。魚の養殖をやると二年もたない。海はわれわれの畑だ」と応酬。一歩も引かない議論が交わされた。

結局、魚類への養殖拡大を認めず真珠一筋を貫いた三浦漁協。総漁獲高だけで見れば現在、宇和島圏域七漁協の最下位だ。しかし、県漁連会長を兼任する浅野組合長は「選択に間違いはなかった」と自信をもって言い切った。

かつて近くの山に産廃処理施設の計画が浮上した際、用地をすべて買いもどしたという同漁協。「ゴルフ場など海を汚す恐れのあるものは絶対受け入れるべきではない」（浅野会長）と力を込める。

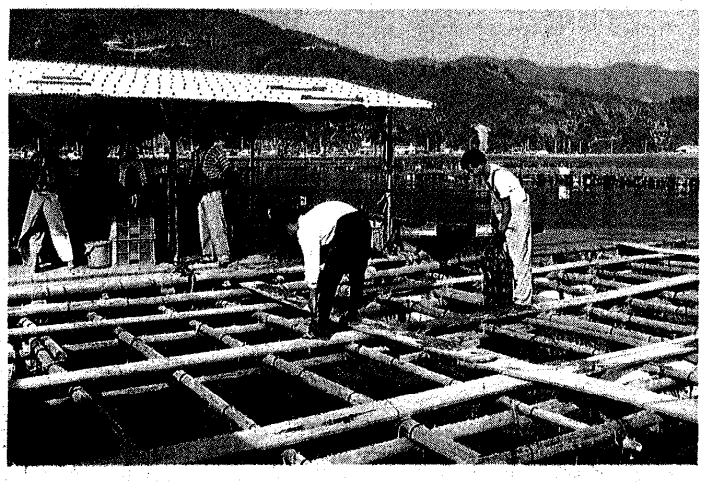
さらに水質改善策として、空気の泡で有機物質を取り除くという機械を湾内三カ所に設置。CODなど数字的変化は見られなかったものの、三年間の実験で「沖合にしかいなかったアカゴシキ（鬼ふじつぼ）が付いた」と、浅野会長は有効性を証言する。

こうした環境改善への漁民の取り組みは宇和海全体に浸透しつつある。

東宇和郡明浜町、明浜漁協（東善吉組合長、四百四十五人）の取り組みも目を引く。先ごろ、海底にたい積したヘドロを、バクテリアによって除去しようという試みに出た。

事前調査で撮影した海底にはヘドロが二㍍もたい積。透明度はなく、不気味な静寂が支配している。そこには生命の営みはない。画面を食い入るように見つめる上村与喜男参事は「このままだと自滅した三重や長崎の二の舞いになる」と危機感を募らせた。

除去剤は、有機化合物を分解させるバクテリアを特殊な砂に含ませたもの。熊本県の島原湾ではアサリ漁場の復活が報告されているほか、工業・農業廃水の浄化にも役立つという"魔法の砂"だ。



新たなヘドロ対策に乗り出す明浜漁協の真珠いかだ

「海をきれいにする方法があればどんなことでもやりますよ」と上村参事。

県漁連の合言葉は「持続可能な漁業」と「二〇〇〇年に総生産額二千億円」。だが、現在の漁船解と協力が欠かせないことは言うまでもない。

漁業は人工ふ化による放流事業に頼っているのが現状。漁獲量に放流量は間に合わず、資源は枯渇の一途をたどる。

持続可能な漁業の達成には「養殖業者も含め、全漁協で中間育成、放流を実施するなど今まで以上の努力が必要。遊漁者の協力もカギを握る」（浅野会長）。

貴重な第一次産業の振興には、県民の理で浮上した県内漁業。約六五％を養殖漁業で占めているという現実のなかで発展するか衰退していくかは、瀬戸内の自然をどう守るかにかかっている。（「海」取材班）

エコメモ

瀬戸内海の水産業

地形的に複雑で多様な魚種がすむ瀬戸内海は、単位面積当たりの漁獲量が高い。瀬戸内海の沿岸漁業の漁獲高は、一九九〇年には約七十四万㌧にも上っている。ただ、水質の汚濁や干潟、藻場の減少などで魚介類の生育環境が悪化したことで、海面漁業の漁獲高は近年横ばい状態にある。これに替わり、ノリ養殖やハマチ養殖、種苗放流などの増養殖事業が発展。今後の漁業の姿を示している。